医療法人社団 輝生会を設立

第３の扉
（1990年代後半～）

1998年　たいとう診療所開設
1999年　訪問看護ステーションわっか開設
　　桜新町リハビリテーションクリニック開設
2001年　訪問看護ステーション桜新町開設
2002年　（医療法人社団　輝生会　理事長）
2002年　医療法人社団　輝生会
　　初台リハビリテーション病院開院　109床
2002～2005年　初台リハビリテーション病院　院長
2003年　在宅総合ケアセンター元浅草設立
　　桜新町リハビリテーションクリニック　通所リハ開始
2004年　在宅リハビリテーションセンター成城設立
　　初台リハビリテーション病院　チームマネージャー制導入、全館オープン　173床
2006年　在宅総合ケアセンター元浅草　通所リハ開始
2007年　成城リハビリテーションクリニックデイサービス・成城
2008年　船橋市立リハビリテーション病院開院　訪問リハ開始
2009年　輝生会本部設置　人事局、事務局、教育研修局
2010年　成城通所リハビリテーションをオープン
2012年　初台リハビリテーション病院　通所リハ開始
　　船橋市立リハビリテーション病院　通所リハ開始
2013年　船橋市立リハビリテーション病院　院内保育所開設
　　在宅リハビリテーションセンター成城から
　　総合ケアセンター成城へ改称
2014年　船橋市リハビリセンター　設立
2016年　成城リハケア病院開院
2018年　（医療法人社団　輝生会　会長）

石川さん、出会いからの25年

水間（みずま） 正澄（まさずみ）　医療法人社団輝生会　理事長

石川さんとの出会いは、25年前の第33回日本リハビリテーション医学会学術集会におけるパネルディスカッション「地域医療におけるリハ医の役割」でパネリストとして同席した時が最初でした。私には遠い存在ではありましたが、急性期～回復期医療、地域医療におけるリハビリテーション医療のあるべき姿に込める熱い思いが伝わるプレゼンテーションであったことを記憶しています。

それから5年ほどして、リハビリテーション専門病院を東京に開設する準備に奔走されておられた頃にお会いする機会がありました。その折に、東京における回復期から維持期のいわゆる地域リハビリテーション医療の提供体制の貧弱さを何とかすべきであると語られ、それに立ち向かう思いと覚悟を感じました。日本リハビリテーション医学会社会保険等委員会、リハビリテーション関連団体協議会などでもご一緒しお話しする機会が増えるにつれ、先生のリハビリテーション医療にかける思いも一層肌で感じることができました。

このような経緯もあり、私が日本リハビリテーション医学会の理事長を務めていた時に回復期・生活期現場の代表として、ご無理をお願いして理事への立候補をお願いしました。そして、理事に就任されてからは社会保険の担当として、さらには関連する団体との関係性を一層強固にするなどリハビリテーション医療発展の大きな力となっていただきました。

また、かねてから地域医療を質の高いものにするためには一般医家にリハビリテーション医療を理解してもらう必要性があると訴えられ、日本生活期リハビリテーション医学会設立の構想を立ち上げ、学会としての基礎を作っていただきました。

その後、輝生会での職員教育・研修を担ってほしいとの熱心なお誘いがあり、お引き受けしました。入職してみるとすでにフラットな関係性に基づいたチーム医療の実践、計画された教育研修制度、地域連携活動等々しっかりとした組織を作り上げられ、有能な人材も育て上げておられました。質の高いリハビリテーション医療の提供のためには職員教育が最も重要であるとの信念に基づいて、日々の臨床をこなしつつ、ここまで人財育成にも力を注いでこられたことにも驚かされました。入職後は病棟主治医や訪問診療などで診療をともにする機会もありましたが、温かく穏やかな診療姿勢や生活の視点での詳細な診療録なども深く心に残っています。

常に人の話をよく聴き、楽しく、チャレンジングな精神をもち続け、エネルギッシュであり、理性的でもあり、真のリーダーの姿を見た思いがいたしました。

石川さんが25年前に私たちに示された構想は、チャレンジングな精神をもって取り組まれ、仲間を増やし、着実に現実のものとなりつつあります。

「思い残すことはない」とおっしゃったのが私への最後の言葉となりましたが、私たちにかけた期待の言葉でもあると思っています。

どうぞ安らかにお休みください。

「わかった、なんとかする」

菅原（すがわら） 英和（ひでかず）　医療法人社団輝生会　初台リハビリテーション病院　院長

2010年に輝生会に入職してから、石川さんとは最後の10年間に最も近い場所でご一緒させていただいた一人となりました。

石川さんの決断力・行動力には驚かされることの連続でした。最も印象に残っているのが、東日本大震災の時のことです。震災３日後に東北大学リハ科の瀬田 拓先生（当時）から「避難所の生活環境がひどくて高齢者が寝たきりになってしまう。リハの視点で動ける人材の派遣をリハ関連の団体に働きかけてほしい」という切実な電話が入り、私はリハ医学会に連絡するとともに、当協会の会長だった石川さんに相談に行きました。「わかった、なんとかするよ」といい残したかと思うと、翌日にはヘリコプターをチャーターして日帰りで現地を視察し、協会内からリハとケアの合同チームを募り編成して途切れなく現地派遣する早業に打って出たのです。これが後のJRAT（日本災害リハビリテーション支援協会）に発展していきました。忘己利他（もうこりた）、即決即断で行動する姿勢には本当に頭が下がる思いでした。

その反面、「頼まれたら断れない」という困った面もありました。2012年夏に初台のイタリアンレストランで医局の飲み会をやった時のことです。お開きの後はいつも「じゃあ」といって足早に立ち去る石川さんがいつまでも帰ろうとせず、私のほうに歩み寄ってきて深刻そうな顔で「菅原さん、引き受けちゃったよ。摂食・嚥下リハ学会」といったのです。てっきり「シンポジストを頼まれて断れなかった。代わりに出てもらえないか」程度の相談かと想像していたら、「第20回学術大会の大会長！　才藤さんに頼まれて引き受けちゃったよ！　どうしよう～」。ほろ酔い気分がすっかり吹き飛ぶ“爆弾発言”が続いたのです。

6,000名規模の学術大会を一民間病院が主催できるのか？　そもそも大学教授でもない石川さんのところになぜ大会長の話が来たのか？　など頭の中が？？？の状態になりました。幸い、院外から藤谷順子先生ら学術的に実績のある方に運営に入っていただき、なんとか大会は成功させることができたのでした

私も含めて近くで支えた者にとって言葉にならないほど大変な経験でしたが、普通では味わえない経験を通してスタッフ全員が成長でき、その後の病院全体の学術活動が活発化する転機になった印象もあります。今思えば、石川さんの安請け合いも、院内の学術活動活性化のための計算された上での判断だったのかもしれませんし、不可能と思われるようなことも周りを巻き込みながらなんとか成し遂げてしまう石川さんらしいエピソードだったのかとも思います。

それ以来、石川さんから急に声を掛けられると身構えてしまう癖がつきましたが、あの時のような体験はもうないのかと思うと寂しいばかりです。

人の何倍もの重荷を背負い、何倍もの決断力と行動力で解決してきた方でしたが、ようやく解放され、安らかにお休みになれるときが来たのかなと思います。

本当に本当にお疲れさまでした。

感謝！　それがすべて

小林 由紀子（こばやし ゆきこ）　医療法人社団輝生会　看護介護担当顧問

2021年5月24日早朝、石川さんが亡くなられたお知らせをいただきました。

数日前、最後にご自宅でお目にかかった時、二人だけのわずかな時間に石川さんは、「小林君……、僕自身もこんなに早く終わりが来るなんて、思ってもいなかった……」とおっしゃいました。しっかり目を向けて少し笑顔で、いつもと同じ石川さんの姿でした。その言葉に何も返すことができず、ただ目を逸らさないで大事な一言を受け止めました。

1978年に群馬大学病院脳外科から虎の門病院に入職され、リハが中心の分院に来られ、同じ病棟で勤務することになりました。当時の仲間たちは皆20代前半から30代前半の若者でした。逆にそれをバネに石川リーダーの下、24時間・365日、日常生活の復活を目指す医療・看護を、団結と情熱をもって展開した日々は大切な経験です。そしてそれが私の看護の原点です。

1986年に高知・近森病院に移られてからも、上京された折には夕方電話をいただき、懐かしいメンバーで集合。徳利を傾け、旧交を温め、賑やかに近況を語り合い、次にお会いするまでのエネルギーにしました。

そして私は2006年に輝生会・初台リハビリテーション病院に転勤。これまでの「同志・相談役」から「上司・理事長」として再度勤務することになりました。回復期リハの創生から発展の15年間、チームアプローチの醍醐味とその緊張感をもった実践を体感しました。

輝生会勤務の中で何回か「石川さんは1980年代のあの頃と変わらない。すごいことですね」とお伝えしました。年月を経ても、発想の根本とそれに基づく行動にまったくぶれがないという意味でお伝えしたのですが、そのたびに「それは、つまり成長してないってことじゃない？」と、笑顔で返事をされました。

石川さんが目指すリハ医療とは、高齢者や障がいをもつ人々が再び輝く人生を送ること。それを目標に、治療、看護、リハビリ、介護などのサービスを提供する「人間の尊厳の保持」です。亡くなられる前日まで介助を希望せず、トイレまで歩かれたことを伺い、最も大事にされていたこの「人間の尊厳の保持」を、医師の石川 誠さんが患者の石川 誠さんを励まし実行されていたと感動しました。

私の生涯で石川 誠さんに出会えたこと、虎の門病院分院で看護の礎を作ってくださったこと、以来、公私にわたり相談をさせていただき、生きること・生活の基礎、生命や人生について多くの教えをいただき、そのすべてに感謝しかございません。本当にありがとうございました。

逝去され3か月がたち、お目にかかれない現実をいまだ受け止められず、葛藤の日々を過ごしています。もうしばらく困り、悩んだ時には石川さんならどうされますか？　と問いかけて過ごすことをお許しください。天から「小林君、それでいいんだ！　もう少し頑張れ！」と、いつもの優しさと心強さを届けてください。

改めて感謝を！　どうぞやすらかにお休みください。

リハ職と対等の立場で真摯に意見くれる医師

池田（いけだ） 吉隆（よしたか）　医療法人社団輝生会　作業療法士

私が作業療法士として働き始めたのは、回復期リハ病棟創設の7年前1993年になります。当時所属していた病院の勉強会で、たまたま近森リハ病院の取り組みを発表する担当になりました。近森リハ病院は、その当時からすでに寝・食・排泄・清潔の分離を徹底しており、「ケアの10か条」を掲げて実践していました。リハビリテーションにおいても、病棟を生活の場ととらえ、実践的なADL訓練を生活の場で行うことに効果を見出していました。

私は、その取り組みに共感を覚え、無鉄砲にも自分の病院でも実践できないかと模索しました。特に排泄をテーマとして、入院していても極力おむつを使用することなくトイレで排泄できないかと病棟でのADL訓練を自分の担当患者で実践しようと試みました。

しかし、当時の病院は、一般的な訓練室中心のリハビリテーションであり、自分一人ではうまくいくはずもなく悶々とした日々を過ごしていました。毎年、全国の地域リハ研究大会には参加させてもらい、遠くから石川さんの講演を聴いているだけでした。

そんな折、2001年に石川さんが広域支援センターの講演で私の地元に来られました。私の上司に講演後の懇親会に誘ってもらい、石川さんと初めて話す機会をもたせてもらいました。ここぞとばかりに、それまでの数年間のもやもやした疑問をすべてぶつけてみました。病棟で訓練をすること、看護との連携や医師の理解などなど、実践したがうまくいかなかったことをぶつけました。1次会、2次会……と夜中まで数多くの質疑をしたと記憶しています。

初対面でしかも一兵卒の私の疑問・質問に石川さんは真摯に一つひとつ答えてくれました。すべて即答でした。われわれリハ職が抱く疑問にここまで対等の立場で意見してくれる医師に出会ったのは初めてでした。その夜のことを機に、2002年、輝生会初台リハビリテーション病院に入職することとなりました。

入職後、飲み会のたびに石川さんから、「池田とはあの時、熱く語ったな」「もらった質問は手に取るようにわかったよ」「今でも全国に同じような悩みをもった若者が多くいるんだ」「そんなスタッフ、全国の仲間と一緒に実践することが大切なんだ」と、何度も何度も話してくれました。

石川 誠曰く、「ヒーローはいらない。皆でやるんだ」。口癖のようにいっていました。

最善のリハ医療をするためには一人では何にもできない、チームとなって初めて無限の力が発揮できるのだと。この教えを心に刻み、今後もよりよいチームアプローチを目指したいと思います。

One for All, All for One　≪ひとりは皆（みんな）のために　皆（みんな）はひとりのために≫

石川さん、これまで本当にありがとうございました。ゆっくりとお休みください。

夢をもつ、もち続ける、諦めない

大西（おおにし） 康史（やすし）　南魚沼市民病院　リハビリテーション科　医師

今年の5月6日、石川さんの次女の升森夕希子さんより、父が末期の胃がんで闘病中とのメールをいただいた。あまりのショックに、このまま逝ってしまわれたらどうしよう、と連絡をいただいた夜は眠れず、朝までに何度も目が覚めた。

2012年に輝生会を退職して10年弱、新潟でのリハビリテーションの実践を支えてくれたのは、輝生会の仕事、仲間たち、そして石川さんからの教えと思い出だったような気がする。

初台リハビリテーション病院が開設する時、私はまだリハビリテーションにかかわる医師として歩き始めたばかりだった。この病院でどうしても働きたいと思い、石川さんの携帯電話の番号を調べ、自分で電話連絡して入職させてほしいと依頼した。

開院前、原宿のセコム本社ビルで1か月の全体研修を受けたことを、今も忘れない。石川さんの講義は本当に輝きを放っていた。そうだ、自分はこういうことがしたかったのだと、胸が高鳴った。日本中から初台で働きたいと集まった仲間たちは個性的で主張も強かったが、石川さんの掲げた方針にいつも立ち戻り、病院の方向性は変わらず揺るぎなかった。

初台での5年間の後、やはり輝生会の在宅総合ケアセンター元浅草で5年間働いた。往診鞄（かばん）とともに街なかを自転車で駆け回り、どれだけの患者さんの自宅を訪問し、そして看取りの時までお付き合いしただろう。ここでも初台同様、素晴らしい仲間に恵まれた。

「チーム医療」、リハビリテーションの実践において当たり前に使われるこの言葉の意味は、どれほど理解され、本当に実践されているだろうか。チーム医療とはきれいごとではない。時にはぶつかることがあっても、それは患者本位だからこそのはずだ。輝生会は、それ自体が一つのチームであった。常に人の入れ替わりがあったが太い柱のような文化が存在し、それは石川 誠さんそのものだった。

輝生会の退職が近づいた頃、石川さんに虎ノ門の料亭に誘われ、食べたことのないような料理をいただいた。その席で、「大西さん、君のような医者を世の中にもっと増やすにはどうしたらいいだろう」と優しい笑顔でおっしゃっていただいた。その言葉がどれほどの励みとなったことか。

5月21日、前日に病院から退院されてきたとのことで、浦和のご自宅にお見舞いに伺うことができた。痩せてはおられたが、以前のように気力を感じることができた。迷いながらもってきた新潟の地酒をそっと取り出すと、飲んでみる、とおっしゃって、少し舐められた。「美味い、これならいける！」と、妻の陽子さんと三人で乾杯した。その二日後に自宅で逝去されたと連絡をいただいた。陽子さんからは記念の盃をお送りいただき、今も大事にとってある。

石川さんには夢をもつこと、もち続けること、諦めないことを教えていただいた。

「大西さん、今も頑張ってるな」といってもらえるよう、自分も常に前に向かって進んでいくことを天国の石川さんにお伝えして、追悼文とさせていただく。

誰よりも働くリーダー

堅田（かただ） 由美子（ゆみこ）　　医療法人社団輝生会　事務局長

頑強でいつもエネルギッシュ、カリスマ・リーダーの石川さんの早すぎる天国へに旅立ちを、いまだに現実として受け止めることが難しい気持ちでおります。

私が石川さんと初めてお目にかかったのは、初台リハビリテーション病院の採用面接の場でした。たまたま、採用記事を見かけ応募したのですが、見事に不合格。在職しながらの転職活動でしたので、私もすぐに諦めましたが、少し経ってお電話をいただき、やはり採用したいとのお話でした。私の経歴から「全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会（当時）」と「全国訪問リハビリテーション研究会（当時）」の事務局を任せたいということで、見学に誘っていただいた研究大会の壇上にロッキーのテーマとともに登場された石川さんを拝見して、なんだか楽しそう……と思い、入職させていただきました。

入職後は初台リハビリテーション病院での院長秘書の業務とともに、事務局業務を担当させていただき、近くで石川さんの働きぶりやお人柄に触れたことは、私にとってかけがえのない財産になりました。当時院長の石川さんには院長室はなく、スタッフと同じロッカー室で着替え、大部屋の机一つで執務をされていました。また、当時は協議会の理事会を院内の会議室で開催していましたので、会議室の設営、コーヒーカップの片づけなども手伝ってくださって、研修会のテキストを前日の夜中に事務室でコピーをしてキンコーズに車で運び、製本して翌早朝に会場に搬入するなど、どんなことも厭わず作業され、私の抱く院長像とはかけ離れた石川さんの姿に驚いたことを覚えています。

院長業務の傍ら、協議会の研修会には委員とともに全国同行されて、ご講演をしたうえに参加者が食べ終わった空のお弁当箱の回収、会場の後片づけまで一緒にされていました。研修会後はいつも二次会に連れて行ってくださり委員や事務局スタッフを労（ねぎら）ってくださいました。お座敷で胸襟を開いて語り合うことを大切にされ、研修会の懇親会では参加者一人ひとりにお酒をついで回り、リハビリテーションへの熱い思いを語り合っていた姿を忘れることができません。

どんなに忙しくても輝生会法人内のさまざまのことに目を配り、細事までご存じでした。感情的な言動を拝見したことはなく、スタッフ皆から敬愛され、「One for All,　All for One」を合言葉に、よりよいリハビリテーション医療を目指して誰よりも働くリーダーでした。

そして、病を得てからの石川さんは常に冷静で、最後までご自分の尊厳を守り抜き、言葉ではいい尽くせない大切なことをたくさん教えてくださいました。感謝しかありません。

あまりに早い天国への旅立ちは寂しく残念でなりませんが、天国では少し寛いで、大好きな日本酒を楽しんでいただきたいと思います。

「まず自分が汗をかく」を徹底

取出（とりで） 涼子（りょうこ）　医療法人社団輝生会　社会福祉士

新宿の京王プラザホテルの「樹林」で初めてお会いした日、石川さんは「僕がやりたいことは全部ここに書いてあります」と3冊の本をのテーブルに置きました。その夜ベッドで1冊目を広げ、2冊目を広げ……気がついたら朝。私はいつの間にか初台リハ病院の立ち上げグループに飛び込んでいました。石川さんは開院当初1年間、ご自身が理想とする輝生会を作るためにすべての入院相談を自分が行い、電子カルテのすべての基本情報・診療情報を自分が入力することなど、まず自分が汗をかくということを徹底されていました。私は「急性期から重度の方も含めてできるだけ早く入院を受ける」という輝生会の入院の質の確立に奮闘されている石川さんに共感し、戦友のような気持ちで働かせていただいていました。

ソーシャルワーカー（SW）たちが「石川マジック」と呼んでいたのは、不機嫌で斜に構えた患者さま・ご家族が石川さんの前で気持ちをほぐしていくさまでした。石川さんは診察室で敬語を外しません。必ず相手の生まれた土地の話を織り交ぜます。体に触って、問診をし、患者さま・ご家族に向き合ってくれました。患者さまが本当に必要としているリハビリテーションのあり方を追求し続けてくださいました。

輝生会で最後の仕事として必死に取り組んでおられた地域リハビリテーション推進事業の作業部会メンバーは全員SWとケアマネジャーの管理職でした。SWとケアマネジャーのよさを理解し大切に考え、活かそうとしてくださっていたんですね。本当にありがとうございました。

常に少しずつでも前に

磯部（いそべ） 香奈子（かなこ）　医療法人社団輝生会　介護福祉士

石川さんとの思い出での中で一番心に残っているのは、回復期リハ病棟で働く介護福祉士の重要性をさまざまな研修で伝え続けてくださったことです。病院で働く介護福祉士の役割を常に考え、日々患者さまと向き合ってケアを提供していました。しかし、自分たちの存在意義を見失いそうになるときもありました。回復期リハ病棟で介護福祉士として何ができるのか、専門職として力を発揮できているのか、不安も多くありました。そんなとき、石川さんは私たち介護福祉士が回復期リハ病棟にいる意味・存在意義をいつも変わらぬ言葉で語りかけてくださいました。「どれだけリハビリが充実していてもだめ。生活を支える看護・介護の力は大きくて重要。輝生会の介護福祉士は日本一だと思っている。だから頑張れ」と。

石川さんからの言葉は、今なお私自身が迷いくじけそうになる気持ちを奮い立たせてくれます。自分たちのやっていることは間違いではないと背中を押してもらっている気持ちになります。現状に満足するのではなく、常に少しずつでも前に進んでいくことが石川さんの残してくださった想いに応えることだと思っています。石川さんが築き上げた回復期リハ病棟で、患者・スタッフともに「輝ける人生」が送れるよう、石川さんからかけていただいた言葉を胸に走り続けたいと思います。本当にお世話になりました。

石川さんの食への想いを形に

桐谷（きりや） 裕美子（ゆみこ）　医療法人社団輝生会　管理栄養士

石川さんとの出会いは2000年、高田馬場のイタリアンレストランでした。大学時代の恩師、杉山みち子先生の講義「栄養状態と身体機能」を聴いた石川さんが「これを東京で開設するリハ病院で実践する管理栄養士を紹介してほしい」と杉山先生に依頼したのでした。大学卒業後、小山秀夫先生の下でアルバイトをしていたのもご縁で、「開設準備室にすぐ入れる暇な管理栄養士」という理由だけで、幸運にも石川さんにお会いするきっかけをいただきました。あの明るい表情で、リハ病院を開設する意義、想いを熱く語られた後、「そこで働かないか」と尋ねられ、「よろしくお願いします」と即答しました。自分の能力は横におき、石川さんの魅力と「面白そう」という印象だけで返事をしてしまいました。私の人生を変えた瞬間でした。

「リハビリの意欲を引き出す美味しい食事とベッドサイドでの栄養管理」をテーマにスタートした栄養部門の根本は今も変わりません。「選択メニュー制、腕のよい調理師をそろえ、陶磁器の食器でパントリーから配膳」という石川さんの理想を皆で試行錯誤しながら形にしています。名店「アピシウス」の柄を模した洋食皿は今でも初台で使っています。未熟でできないことばかりの私を「できないことは可能性」と信じて支えてくださった石川さんに十分恩返しができないままですが、石川さんの食への想いをつないでいく一人になりたいと思います。

これまでご指導ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

石川さんのパワーの源

山中（やまなか） 誠一郎（せいいちろう）　医療法人社団輝生会　理学療法士

ある研究大会の打ち上げの席で「患者さんの診療をしながら日本全国を飛び回り、馬車馬のごとく世のため人のために邁進するそのパワーの源は一体どこからくるのですか」と石川さんに尋ねた。「患者さんや地域で困っている人がいるから」といった答えが返ってくるかと思ったが、一呼吸おいてニコッとし、「そりゃあ、お前たちがいるからだよ。俺には想いを一緒にして最前線で頑張っている輝生会の仲間が千人いる。こんなに凄いことはない、こんなに嬉しいことはない。皆からパワーをもらっているんだ」と石川さんスマイルで答えてくれた。

ノックアウトである。こんなちっぽけな自分たちにこんなにも期待してくれているなんて。

ラグビーでは若いわれわれの誰よりもアグレッシブにボールを追いかけ、クロスカントリーでは真っ先にグラウンドに出て率先して林道コースへ滑っていく。われわれはもうついていくのみ……。仕事でも遊びでも自ら汗をかく大切さを体現して教えてもらった。「想いを同じくするスタッフが全国に広がれば日本は変わる、こんなに凄いことはないんだ」と常々言葉にしていた石川さん。誰よりもスタッフを大事にしてくれた石川さん。これからは石川さんの想いに触れたわれわれが、それぞれ受け止めたリハマインドを胸にしっかり引継ぎ、未来への飛躍に向かって邁進していくことで恩返ししていきます。本当に、本当にありがとうございました。

豪快なのに細やか　溢れる人間味

澤潟（おもだか） 昌樹（まさき）　医療法人社団輝生会　作業療法士

石川 誠といえば、豪快で先頭に立って道を切り拓く人というイメージをもつ方が多いと思います。石川さんの下で働く中で、イメージとは違う一面を拝見しました。私はラグビーやクロスカントリー、飲み会等、仕事以外の場面においても石川さんと多くの時間をご一緒させていただきました。その中で、石川さんの周囲は常に整理整頓され、何か物事を始める際には緻密な計画と余念のない準備をし、周囲の人に対するおもてなしの心を大切にする、とても細やかな方だと知ることができました。

石川さんが大切にしていた活動の１つに、クロスカントリースキーがあります。この活動は全国から仲間が集い、障がいを有する方々が諦めていた一歩を踏み出せるよう、一緒に雪山に出かけ､チャレンジすることに寄り添う企画です。この活動で､石川さんは事前に現地を下見し、当事者の方が困らない設備が整っているか自身で確認し、内反が強くスキー板が履けない人のためにスノーシューを準備し、参加してくれた方々が楽しめるイベントを企画し、自らお酌をして回り皆をもてなす等、そのエピソードは語り尽くせません。豪快なのに周囲への細やかな心配りを忘れず､スタッフが宝だといいきる人間味溢れる恩師に出会えたことは私の財産です。石川さん、またお酒を飲みながら、いろいろな話を聞きたいです。会いたいです。その時が来るまで教えを胸に、私は仲間とともにもう少し頑張ります。見守っていてください。

馬鹿者！

恩田（おんだ） 暢子（のぶこ）　医療法人社団輝生会　言語聴覚士

石川さんとの出会いは、2000 年に高知の近森リハビリテーション病院へ見学に行った時でした。それから回リハ病棟協会の研修委員会活動を通して定期的にお会いする機会があり、縁あって、2010 年に初台リハビリテーション病院に入職することになりました。多くの方がそうであったように私もまた、石川さんとの出会いで人生に大きな影響を受けた一人です。

初台リハビリテーション病院に入職した直後の、回リハ病棟協会主催の全職種研修会の委員控え室での出来事です。他病院の方から初台に入職しての感想を聞かれ、入院患者さんやご家族からの要望がとにかく多いことに戸惑うという話を私がした時でした。離れたところにいらした石川さんが突然「馬鹿者！　恩田、それは違うぞ。本来病院はそうあるべきなんだ。患者家族がいいたいことがいえない今の病院のあり方が問題なんだ」と､割って入ってこられました。

たくさんの思い出や学びの中から何を書こうか考えた時最初に浮かんだのが、この愛情溢れる「馬鹿者！」でした。石川さんからの一番の学びは、この「患者優先・患者中心」。当たり前のことのようですが､中々どうして実践は大変です。微力ながら､患者優先･患者中心の実践、そして、リハマインドをしっかり後進へつないでいきたいと気持ちを新たにしています。

石川さん、弱音を吐いたらまた「馬鹿者！」と叱ってください。

2つのことばに感謝

宮田 昌司（みやた しょうじ）
日本訪問リハビリテーション協会　会長
元 医療法人社団輝生会　在宅部門　理学療法士

私が石川さんと出会ったのは、1992年頃だったと記憶しています。「高知県に凄い取り組みをしている医師とチームがいる」と業界の話題になっておりました。「この人を中心に、何かが起こる」。そのような予感すらありました。

医師の長谷川 幹（はせがわ みき）さんと玉川病院を辞し、東京・世田谷の桜新町リハビリテーションクリニック開設に参画。念願の在宅医療に携わり充実した日々でしたが、「仲間がほしい」との気持ちがもたげ、1998年、有志の場「とうきょう訪問リハビリテーション研究会」（後の全国訪問リハビリテーション研究会、現 日本訪問リハビリテーション協会）を作りました。その第1回研究会を当時新宿区戸山町にあった東京都身障センターを借り開催、石川さんと長谷川さんに講演をしてもらいました。療法士が70名ほど集まったことを鮮やかに覚えています。その後、輝生会に入職、在宅部門に携わりながら、訪問リハビリテーション研究会の活動の展開に腐心してきました。

ある時、研究会の運営がうまくいかないことを石川さんに愚痴ってしまいました。すると、「時代がつぶさせないよ」と笑って慰めてくれました。また、「いつか訪問看護振興財団のような立派な団体にしたい」、そんな思いをメールに認（したた）めると、「いつかそうなるさ、今できることをやりなさい」と返事をくださいました。この2つのことばは私の中に深く刻み込まれています。

まさに、一つの時代とともにやってきて大きな足跡を残し、静かに去っていかれたように思います。謹んでご冥福をお祈りいたします。

輝生会　ラグビー部合宿　2005年8月

輝生会 初台リハビリテーション病院開院式典
2002年6月

初台リハビリテーション病院
院長時代の病棟ミーティング
風景　2003 年

左：輝生会同窓会の一場面　2018 年
上：72 歳誕生日のサプライズ　輝生会本部　2018 年

上左：テレビのトークドキュメンタリー番組「カンブリア宮殿」出演時、色紙に書いた言葉　2017 年
上右：輝生会研究発表会 浜村明徳氏（左）特別講演後の懇親会でポイントヒア　2011 年